

## 白山麓白峰村における明治大正期製糸業の変貌

矢ヶ崎 孝雄

### 一 はしがき

山地は一般に工業の稀薄地帯である。しかし明治以降、資本主義の進展につれて、或る種の工業が山村に成立、その構造を変貌せしめて来ている。この場合、製糸を発端とするわが国工業の発展趨勢の枠外に、山村とでもありうるわけではなく、製糸業が山村における工業発展の端緒となる場合が多い。ここにとりあげた白峰はまさにその好例である。

出作りの村として白峰は古くより学界の注目を浴びて来た<sup>①</sup>。出作り地における焼畑経営は、自給食料の確保を計る一方、山桑栽培による蚕業を主要な現金収入源として持続した。養蚕・製糸（糸挽）はこの山村の主産業といつても過言ではなかった。明治以降資本主義の滲透は、比較的はやく近化的製糸場をこの山村に成立せしめ、その推移に隆替を孕みつつも、今次大戦時の企業整備まで存続した。また製糸に随伴して紬織が明治末葉から工場化された。大正中期からは製材工業が勃興して、現在は工業の中核に発展している。戦後は「なめこ」食料品工業も拡大されつつある。これらはいずれもその山村のもつ山地資源に依存して成立したものである。一方白山の砂防工事は、荒れ河としての手取川治水の抜本策として、大正中期以降継続施行されて来ており、また戦後は電源開発工事がこの山村を一

時賑わした。これら建設工業は山村変貌の有力な要因であった<sup>⑧</sup>。

かくて出作り農業は衰退過程を辿りつつあるが、それはとりもなおさず蚕業の退行であり、製糸業にも影響を与えた。ここではその基幹産業であった製糸業の推移を辿ることにより、山村の変貌過程をみることにした。まだ未整理の点もあるので、中間報告として、大方の御教示を得たく思っている次第である。

## 二 在来の製糸と近代化の萌芽

明治初期までの製糸業

白峰村は「往昔ヨリ養蚕及ヒ製糸ヲ以本業トシ、農業之レカ従タリ」<sup>⑨</sup>と称され、「蚕飼之義……当谷之大一(マヤ)の産業」<sup>⑩</sup>という程であった。現に明治一〇年島(桑島)村物産表では生糸・繭はその主体をなしていることを知る<sup>⑩</sup>。その経営は「本村重立タル者ヨリ養蚕家へ、該仕入ノ為前年ニ金穀ヲ貸渡シ、負債主ハ翌年ニ至リ、該年ノ成繭或ハ製糸ヲ以テ債主ニ返済ス。若シ養蚕不作ナレハ、債主ハ幾年間ニテモ金穀ヲ貸渡シ、以テ蚕業ヲ為営、必ス成繭若クハ製糸出来ノ時ヲ待ツテ決算ヲ遂クルノ慣法」<sup>⑪</sup>であった。桑島の竹腰家では、米塩茶葉その他日用品から桑苗・現金などを村民に貸与し、布繭系炭などを買取っている<sup>⑫</sup>が、村内最有力者の親様層が糸の売買を大規模に行っていた。

白峰の親様である織田家は「天保年中々別に此帳(注一 万糸仕入帳)相調用申候也。糸・まゆ井二布・紬等の仕入も時ニ依而付申」<sup>⑬</sup>す仕来であった。桑島の親様杉原家も同様で、たとえば明治一〇年、桑島・牛首・下田原・鴉ヶ谷・尾添おとぞなどより糸を買集め、福井・勝山へ売渡している<sup>⑭</sup>。また牛首の次郎兵衛は織田家より三百四拾匁の銀子を借用、返済は「壹ケ年に蚕飼仕、糸百匁ツツ」拾二年間納めて完了することを約している<sup>⑮</sup>。すなわち養蚕・製糸は一般村民が本村・出作りを問わず、一貫して行って来たことを知りうる<sup>⑯</sup>。しかし前記竹腰家では繭を買入れ、雇人を

もつて製糸を若干行つており<sup>⑥</sup>、杉原家でもすでに幕末雇人に対してと思われる糸引賃の記述があり<sup>⑦</sup>、マニユファクチャーの萌芽的形態をすでに認めうる。

安政六年(一八五九)に始まる生糸海外輸出以降、わが国蚕糸業は目覚ましい発展を遂げるが、白峰においてもこの傾向は同様といえよう。幕末まで天領の治下におかれた当白山麓は、明治初年福井藩領となつたが、牛首糸の産地としての蚕糸業の盛行はその発展のため、明治三年旧福井藩主松平をして金二万円の助成金を貸付せしめる程の土地柄であつた<sup>⑧</sup>。これは以後明治十年代にいたるまでの官行保護奨励策の先驅をなすものであつた。輸出の発展は生糸の量を助長する一方、糸質の向上を要請せしめ<sup>⑨</sup>、かくて明治政府による官営富岡製糸場その他による洋式器械製糸の導入・普及となつた。従来の手換による家内工業より近代工場に発展するのであるが、明治五年(一八七二)当白山麓が管轄換せられた石川県でも、明治七年富岡製糸場の技術を導入した金沢製糸社の設立をみ<sup>⑩</sup>、急速に県下一円にその技術の敷衍をみた。この動向は白山麓の僻村とはいえ、蚕業第一のこの山村にも波及し、その主邑たる白峰に製糸場を興すに至つた。明治十一年である。

#### 近代製糸場の成立

藩政時代機業の著しい進展をみた石川県は、その原料糸確保の面からも、全国的な蚕糸業奨励の風潮に同調して、その奨励に尽力するところ大なるものがあつた<sup>⑪</sup>。金沢製糸社に移入された洋式製糸はその一幹をなすものであるが、やがてそれに改良も加えられ、旧士族にして養蚕教授の任にあつた津田近三<sup>⑫</sup>は足踏による単線車(一人取製糸器)を試製した。県はその普及に努力し、小松の石田嘉右衛門がその衝に當つた模様である。彼は「山家壁邑ノ地江先以テ弘メ」るべきとして、明細な見込書を県当局に具申し<sup>⑬</sup>、県は白峰村の篤志者に試験操業を通達した。白峰・

桑島兩部落ともにその受容の気運があつた<sup>⑧</sup>が、白峰の織田家がこれをうけ、石田氏とともに明治一一年試験操業した。翌春兩氏は製品を携えて横浜に至り、「至極良品」との評価のもとにこれを売捌き<sup>⑨</sup>、つぶさに商況を見学し、製糸操業の確信をえて帰郷した。かくて織田発・石田嘉右衛門を正副社長とする白峰製糸社（単繰車廿五台に手挽を加える）が明治一二年六月雪深い僻邑の白峰に成立をみた。

ところで、かかる大事業の経営主の問題であるが、一般山村民に起業の識見と資力はなく、とくに当地のごとき僻村においては然りであつた。全般的に幕末以降、手挽・坐繰マニユファクチャーが糸商人の経営から始まり、明治以降は農業資本からの転化者によるものが発展し、富豪農層により経営される傾向にあつた<sup>⑩</sup>。ここでは商業の分化は未発達で、流通機構は地主層に握られ、中世的遺制とみられる地内子制度を温存して来た親様<sup>⑪</sup>の大地主層が、すべての権能を掌握していた。事業主は当然にこの階層に求められねばならず、かくて織田家に受容されたのであるが、それにはまた織田家の内部事情があつたわけである。

織田家はその由緒書「家之規矩」<sup>⑫</sup>によれば、元禄一三年（一七〇〇）没の利右衛門を元祖として現在にいたる旧家であり、越前への出作り経営から大阪表にての商業に発展、金沢表に出張店を持ち、金貸・木呂商売を営み、加越に「牛利」とその雄名をはせたが、商売はその富裕化の重要な要因であつた<sup>⑬</sup>。文化文政期はその黄金時代で、その経営の基盤には「小方」と称する地内子が盛時は二百戸に及んだという。

ところで、幕末維新以降織田家の経営にはひびが入つて来た。「当家営業ハ従来ヨリ酒造・米作り・養蚕・杉板製造販売ナリ。然ルニ明治元年七八年前頃ヨリ不景況ニ段々と及ビタルニ、七代目主人ハ能ク考フルニ、酒造スルモ勝山町・鶴来町ヨリ米ヲ登スルモ、多量ノ運賃ヲ要シ利益更ニナク、米田作り養蚕スルモ是又多量ノ人夫ヲ要スルタ

メ、田八地内子共ニ貸渡シ年貢ヲ納メサス事ニシ、桑八村ノ養蚕家ニ売ル事ニ成シタリ。杉板製造販売ハ改革ノ年（注一明治一五年）迄営ミタリ<sup>⑧</sup>という事情である。地内子を基盤とする手作り形態から寄生地主的形態へと転化した。全親様層がかかる傾向を示したわけではなく、幕末・明治以降の社会経済の変転に微動もせず現存する家もある。

織田家のかかる退勢の因由<sup>⑨</sup>は第一に万延元年（一八六〇）以降三度の大火災である。フェーンの吹走、水利の悪い段丘上の集落位置と草葺家屋の密集、消火機能の未発達などにより大火を誘発する土地柄であるが、この為地内子への衣食住全般の支援、貸付金穀・諸物品代の返済並びに年貢納入の停止などは織田家の活動を圧制した。第二に明治五年金沢第七聯隊営舎の床板納入のための流送木呂の流失が挙げられる。これは再度伐木に及んだが納期におくれて腐らせ、一層その損失を大きくしたと云われる。よって退勢を挽回すべく明治九年生糸の大量買付を行ったが、糸価下落により多大の損失となった。これが第三の原因である。地内子制度温存と、他方幕末以降急激に進展して来た商品流通経済の滲透とは、織田家の存立を内外両面より圧迫したが、前記災難は一層その度を強めたといえよう。かかる織田家の窮乏はさらに地内子を含む山村民にも当然波及するものであり、かかる窮乏の打開はその当主たるヒューマニスト織田発の心情を揺ぶるものがあつたといえよう。かくて発は家運の再興と当山村の発展とを、その基幹産業であり、かつ全国的に発展の趨勢にあつた蚕糸業に托したのであつた。

白峰製糸社の経営は明治一一年の試験操業に基き、五ヶ年平均の黒字年六百円の目論見のもとに発足した。以下その経営実態を瞥見しよう。

#### 原料繭

春繭購入を主体とし、その購入圏は明治一二年第一図のごとく、村内を中心として谷峠越の越前側並びに



第1表 白峰製糸社の繭購入量 明治13年

	数 量	金 額	石当単価	信州繭購入経費	
地 繭	石 57.450	円 1,473.184	円 25.7	信州白峰間運送賃	28.0
信州繭	52.146	1,657.710	31.8	買付入費・荷造蒔等 人足日給(1人・27日)	7.7 27.0
計	109.596	3,130.894	28.6	繭仲買口銭 計	22.0 84.7

才出入決算簿・社費詳細簿・日記などより計出。

ことを目的としている。これは士族授産の一環としての富岡製糸場の流儀<sup>⑧</sup>をついだものとみられ、営利目的とならんで多分に地元産業の育成を目的としていた事業主の意向を反映したものと見えよう。工女は雇入・有志生徒の二類とし、入場にあたり「定約証」をとり、就業期間を定め、満期退場の際に卒業証を与えることとした。

教師は県の幹旋により越中福光の製糸場より二名が派遣された<sup>⑨</sup>。操業は春繭の集荷をまって六月中旬開始、九月上旬の益に休業、工賃を清算し、あと十二月まで操業した。冬は休業したが、雨天には用水の混濁により臨時休業もした。就業時間は朝六時より夕五時までとしたが、日中の長短に応じて伸縮された。金沢製糸社の八時三九分に比し、著しく長い<sup>⑩</sup>。その日給は技術に応じ十等級(各等正準があり、計二〇階級)に分ち、最高二〇銭、最低参拾で、金沢製糸社の最上級一銭よりはるかによくなっている<sup>⑪</sup>。

工女は自宅通であったから、地下<sup>⑫</sup>の白峰部落内に地域的に限定され、しかも夏季を中心とした労働であることから、出作りの婦女は従業できなかつた。第二表で工女の実態をみるに、年令では二四才以下を主とし、とくに十代の層が多い。その多くは未婚者と推定され、繰糸技術の伝習には好適な層といえよう。ところで地内子と工女との関係は、織田家よりの二名を除いて

第2表 白峰製糸社工女の実態 明治11年

		10才以下	10-14才	15-19才	20-24才	25-29才	30才以上	計
繰 曳	織田家			1	1			2
	地内子			1	1			7
	一般		4	5	2			11
	計		9	7	4			20
緒 取	織田家		1(1)					1(1)
	地内子	1	4					5
	一般		3					3
	計	1	8(1)					9(1)
大 箕 ・ *蘭 撰 方	織田家	2			1			3
	地内子						*2	2
	一般				1			1
	計	2			2		2	6
退 業	織田家		1	2(1)				3(1)
	地内子			4	1			5
	一般			2	5			7
	計		1	8(1)	6			15(1)
合 計	織田家	2	2(1)	3(1)	2			9(2)
	地内子	1	9	5	2		2	19
	一般		7	7	8			22
	計	3	18(1)	15(1)	12		2	50(2)

工女等名簿より計出。( )は織田家の家族。

第3表 白峰製糸社工女賃金 明治14年

日給計 人工	～4円	4～8円	8～12円	12～14円	計
～20日	3				3人
20～40日	4				4
40～60日		3			3
60～80日		1	10	2	13
80～90日			12	9	18
計	7	4	22	8	41

工男女日給計算簿による。

工女五〇名中、地内子は約六割の二八名、さらに織田家直屬のそれは一〇名である。したがって地内子制度が労使関係の命脈をなしたとは必ずしも云いきれないであろう。その設立趣旨からして広く工女を募つたのであり、経済的、労力的に地内子層よりの就業者が隸屬關係を越えてやや多数であつたと見られる。退業工女一六名の理由は死亡二、嫁入六、家事多忙一のほか、下婢四、子守・拙芸・脱走各一で、この七名は結局拙芸によるものと考えられ、繰糸技術の習得はかなり難しかったものといえよう。輸出系の場合、生糸の量と質の向上は製糸家の等しく要求するところであるが、工女のこのための労苦は白峰にても数々の「糸ひき唄」<sup>⑧</sup>の歌詞に偲ばれる。

明治一四年工女の最高は準四等、最低は十等であつた。その収入は第三表に示すが、六〇日以上の就業で八一―四円に及んでいる。平均日給一三・四銭、当年白峰で白米一升一一・五銭と比較して低賃金である。しかし就業機会の皆無に近かつた当山村の子女にとつては絶好の収入源とみられよう。この賃金は家計の有力な支えとなつたらしく、工男女日給計算簿では多くの家が賃金を目当てに米穀・現金を前借している。

第4表 白峰製糸社輸出糸ならびに諸経費

生 糸	年度	売渡年月日	量	金額	単価(貫当)
	明治		貫	円	円
	11	12. 4. 21	45.92	1,561.622	34.01
	12	13. 4. 6	38.37	2,623.101	68.36
	13	14. 5. 1	59.31	4,131.872	69.67
諸 経 費  (明治一四年)	費 目			金額	
	生糸運賃(白峰一横浜)			19.865	
	糸問屋原善三郎へのみやげ(紬1反代)			4.320	
	糸問屋番頭3名への菓子料			10.000	
	生糸荷造入費(縄・葦代)			1.500	
	郵便・印紙代			1.000	
	石田嘉右衛門への払渡(生糸代の約 5/1000)			20.442	
	生糸売込入費・電信料等			6.925	
	糸問屋口銭			51.628	
合 計			115.680		

生糸等売払帳・社費詳細簿による。

**製品** 同社の製糸は輸出生糸であつた。器械製上生糸(第四表)は直接横浜に搬出、糸問屋を通じて売渡された。夏・秋にかけて生産された生糸は、翌春深雪の消えるを待つて搬出された。その径路は明治一一年の場合福井より坂井港(三国港)に出、海路敦賀港に到り、塩津・大津・神戸を経、一週間で横浜に到っている<sup>⑧</sup>。高価軽量な生糸のため運賃は至極糸価に対して低く、交通不便な僻地から遠隔地の市場によく販売し得た。ただ問屋口銭その他諸入費が嵩み、総額は約一二〇円に達している(第四表)。しかし、その糸価は横浜相場と比較して決して低くはなく<sup>⑨</sup>、前記の好評もあながち誇張ではない。元来むつしの山桑による成繭は糸量に乏しいが、強伸力と光沢に富み、かくて白峰糸は越前の羽二重原料として賞用された<sup>⑩</sup>が、輸出商品として

第5表 白峰製糸社の収支決算

		明治11年	明治12年	明治13年
支 出	代 給	1,621.609	2,287.599	4,032.591
	日 給	275.697	275.030	654.807
	料 給	463.251	225.030	374.015
	費 雜	243.643	351.538	670.365
	計	2,604.200	3,139.197	5,731.778
収入	代 売 等 糸 生	1,794.101	3,344.511	5,319.116
差 引	支 収	-810.099	205.314	-412.662

才出入決算簿による。

もまた好評を博した点は注目に値する。

經理 製糸社の經理内容を第五表で見ると、明治一二年を除いて赤字となり、操業当初に目論まれた黒字計画は無残に打破られた。とくに初年度の赤字は大きい。明治一二・三年は糸価高騰の好況期であり、白峰糸も有利な取引を得たことは前述のごとくであるが、それでも一三年には赤字を生じた。すでに金沢製糸社が赤字の悲運を辿っていたが、その轍は当然に織田家にも熟考されたのであろう。しかし結果は全く同様に現れた。その原因はどこにあったのであろうか。

同製糸社の決算簿を検当するに、才出入の各項につき著しい利子が付加されていることを知る。今、明治一三年の場合をみると(第六表)、利子を除いた金額の収支では黒字を生じているにもかかわらず、利子は黒字の約倍額に達している。この利子は会計年度末の翌年六月まで付されたものである。才入の利子は生糸が翌年四・五月に販売されることから極めて少い。ところが才出の約七割を占める繭代は約一年近く利子を計上することになり、その額は著大となる。社に運転資金がなく、しかも資金回転のかように

第6表 白峰製糸社収支決算と利子 明治13年

		金額	利子	合計
支 出	代 給	3,130.894	901.697	4,032.591
	日 給	555.815	98.992	654.807
	料 給	324.902	49.113	374.015
	費 給	549.594	120.771	670.365
	計	4,561.205	1,170.573	5,731.778
収入	生糸等売払代	4,967.118	351.998	5,319.116
差引	収支	405.913	-818.575	-412.662
備考 利子は月100円につき、7—12月2円、1—6月2.5円の割				

才出入決算簿による。

遅い点は、その経営を全く不如意とした。製品を即時販売現金化し得なかつた点は、生産量が少く市場を遠隔地に求め、しかも交通ならびに流通機構の未発達に基くものとみられよう。

収支費目の構成を見よう。第七表に全国・石川県の事例を併記した。年次・経営を異にするため厳密な比較は不可能であるが、一応の目安は得られよう。その支出は蘭代の比率は低い、工女・掛員の人件費が高率で、とくに掛員給料が高い。しかも収入では生糸の比率が低い。またその糸質は優良としても、このために要する繭・工女はともに多量である。勿論明治二一年に比較して当時は技術の低劣はおおえないが、それにしても人件費が高く、生産性の低い点は認めてよいであらう。

経営の破綻は多額の利子により決定的とされたが、さらに人件費の膨張と生産性の低さが加味され、交通不便な山村の地域性も作用したとみられる。

**資金** 製糸社則では社員四名が義定金百円宛を納入す

第7表 製糸場経営内容の比較

		明治21年		明治13年
		全(坐 国 線)	石(平 川 均)	白製糸 峰社
支 出	代料	79.1	79.0	70.4
	給料	10.4	9.3	11.4
	給料	2.0	2.2	6.5
	雑費	8.6	9.5	11.7
	計	100	100	100
収 入	糸	94.2	94.5	92.1
	闘斗糸・生皮等・其他	5.0	4.6	7.1
	雑収入	0.7	0.9	0.8
	計	100	100	100
差引収支		円 2.458	-14.748	-412.662
生糸代 ÷ 繭代 × 100		114	116	110
製糸 百斤 当	数	17.75	22.11	29.57
	人員	533	714	936

明治21年資料は農林省農務局 農事調査表巻ノ二による。

る定であり、「繭購入等ノ資本金ハ社中ノ者ヨリ公平ニ出金セシメ、他日決算ノ時相当ノ利子ヲ附シ元利返金スル」<sup>⑧</sup>定であったが、その履行を裏書する資料はみられない。同社の諸帳簿をみるに、同社使用の薪炭・工女の前借金敷は織田家が担当しておることから、資金操作は同家が行ったものとみられる。同社は一応結社の組織をなすが、実質は織田家の個人経営であったといえる。

ところで原料繭購入のため、多額の金を集中的に調達せねばならなかった製糸業の一般性<sup>⑨</sup>は、ここでも同様であった。金

融機関未発達の明治初期はとくにこれは重大問題であつた。衰運傾向にあつた織田家とはいえ、まだ土地・林木の有は絶大で、この背景のもとに運転資金は借入金に仰がれた。この場合政府の産業保護奨励策として放出された政府資金にたよるのが、明治一〇年代の傾向であり、同社でもまずこの方途がとられた。明治一二年六月、起業資本金五千円の貸付を県当局に願出ている。「諸会社等ヨリ金借セント欲シ候へ雖、徒ラニ高利ノ為メ純益ヲ得ル能ハス」<sup>(ママ)</sup>といっている点に官金借用の有利性が如表に示されている。しかしこれは不許可となり、翌一三年には白峰が大火に見舞われたことも加味されて、再度一・五万円の借用を願出たがこれもまた不成功に終つた。これらの願出のため、連署者には相応の出費を要したが、これは不成功のため織田家の内情を一層苦しくした<sup>⑧</sup>。しかも再度出願した点に資金難の程をよく推知しうる。ところで石川県に対する貸付官金は、明治一三年土族授産の目的で七万円、うち三・五万円が金沢惣糸社の後身興産社へ、約一・五万円が自家営業者へ、二万円が準備金に当てられた<sup>⑨</sup>。かかる事情からして白峰製糸社への貸付を優先するのは困難であり、かつその要請金額は余りにも多額であつたといえよう。

かくて運転資金は民間融資に求められねばならなかつた。創業前の明治八年、織田家は大聖寺融通会社より千円を利足月一・八一・二分（年利約二・二―二・七割）で借用した<sup>⑩</sup>。明治一二年四月横浜での生糸売渡に際しては、糸価下落のための中勘で代金先渡の一部受けてはいる<sup>⑪</sup>が、常時糸問屋の融資を仰いだとはみられない。したがつてその資金は地元もしくは近隣資産家より借入れたものと推察される。この場合大聖寺金融会社の利率と近似のものが費用されたと思われ、前記決算簿の利子計算は過大ではなかつた、企業の赤字は織田家の経済を一層困難にし、かくて製糸場は廃業にいたるのであるが、官金借用の願出は当谷有力者の連署をもって、明治一五年（一・五万円）<sup>⑫</sup>、同一六年（二・五万円）<sup>⑬</sup>と続けられた。しかしいずれも不首尾に終つてゐる。

## 豊成社設立と製糸社の終末

かかる経営の実態を挽回するため、当然対策が樹てられねばならなかった。織田家は明治一四年、養蚕・木材の売を目的とする豊成社を興すに至った<sup>⑧</sup>が、その内実は製糸社衰退の根本原因を払拭するための、低利資金供給を実現することを目的とするものであった<sup>⑨</sup>。かくて同年県より二・五万円の貸付許可を得、積年の努力が報いられたとされている<sup>⑩</sup>が、不幸同年発はその実現をみず不帰の客となった。この為か現実には資金借用は履行されなかった模様である。製糸社の柱石発の急逝によりその運営は行詰り、明治一五年には製糸社は廃業、織田家は「大改革」と称する家財整理をせまられるにいたり、多大の抱負をもって発足した事業は却って織田家の生命を扼する結果となった。

このあと明治一六年より工場は同一社名で村内有力者により再興され、経営を持続した<sup>⑪</sup>が、資金調達の必要性は変りなく前記官金借用の願出となった。その経営内容を示す資料のないため、実態は不明であるが、さしたる伸張もみられなかったらしく、明治二十年製糸器械は残らず売却されている。<sup>⑫</sup>

## 製糸社の地元及びした影響

製糸社が創業に当り提唱した製糸技術の高揚は、事業の失敗にもかかわらず、成功したといつてよいであろう。元来手挽により、越前機業の原料糸を挽き、その糸質は認められてはいたが、規格の厳しい輸出製糸の技術を伝習せしめ、これを地元に残したことは以後の製糸発展の前提をなしたものと見えよう。また現金収入の機会に恵まれず、とくに婦女の労働力を賃銀化し得なかった当時の山村において、想定の現金収入を得しめたことはその家庭経済の有力な支えとなったであろう。またこのことは一般民を商品流通経済の坩堝に引入れしめ、その封建体制をくずす端緒となつたともみられる。当山村民は工女としての就労を、たとえ労働に辛苦があつたにしろ、喜んだという伝承は当

然と思われ。

輸出糸質の改良には製糸技術の高揚とならんで、繭質の改良が必要であつた。このためには養蚕技術の改善を要求するが、この点についても織田家は深い関心を示した。<sup>⑤</sup>ただそれがどの程度具顕したかは不明であるが、山村氏にその眼を開かした点は認められよう。

白峰一带は古くより越前勝山の商圏に属し、流通上不当な取引をせまられたが、これは地元産業の育成をはばむものであつた<sup>⑥</sup>。製糸社の発足は従来の越前商人の買たたきを脱し、その主産物たる産繭を有利に販売し得る利益を与えた。勿論従来より繭、糸は地主商人の手を通じて売捌かれ、村民と地主商人との取引関係は単なる商業関係以上の深い関係があつたが故に、それを越えて白峰製糸社が集繭するためには若干高価に買取る必要にせまられたことは容易に想像される。これはまた従来の手挽による小マニユファクチャーや問屋制家内工業に影響を与えたといえよう。現に桑島の資産家杉原家は、同社員でもあつたが、糸の売買量が明治一二年以降著減している。<sup>⑦</sup>恐らく当初製糸社の出現は地主商人層からは快く迎えられなかつたであろうが、良質糸製造と中間商人の排除による取引の有利性は、等しく同感されたものであろう。明治十六年拝借金の願書に白峰・桑島・鶉ヶ谷の有力者の署名のみられる点は、<sup>⑧</sup>それが当時戸長役場の行政区域に相当することも関係があるが、製糸社の有用性を認めての結果とも見られる。

かくて明治二十年代糸価の好況の許に、この谷奥に新たな製糸場が設立をみるが、その機運はここに醸成されたと推察される。一方僻村の交通不便は物資の流通・通信上の不利を痛感せしめ、とくに変動甚しい糸価に対して聲援に置かれていることは、当山村の発展を抑制すること甚大なものがあつたとみられる。かくて交通改善の重要性を村内識者に一層明確に認識せしめたといえよう。<sup>⑨</sup>

### 三 製糸業の隆替

#### 白峰製糸場の成立

白峰製糸社廃業以後手挽座繰が復活し、製品は従前の仕来により越前方面に販出された。しかし企業熱は消滅したわけではなく、明治二〇年代の好況期を迎えて製糸場の新設をみた。すなわち明治二三年織田市次郎(初代)による白峰製糸場(末一製糸場)がこれである。氏は明治一七年手挽による小工場を設立したが、白峰製糸社の器械を購入してこれを拡充したといわれる。

初代市次郎は明谷(みやたに)の出自、明治七年分家して白峰に出、出作り一帯をまわって食料・日用品を行商した。この間漸次資本を蓄積すると共に、村民一般から絶大の信用を得るに到ったといわれる。この信用は爾後の企業発展の根底を培うものであった。かくて白峰製糸社の廃業後自力で製糸に手をつけた。明治二三年には白峰地下ののる段丘崖下の尻江地籍に水車による製糸場を設立、兄清兵衛(1/3出資)と共同で創業した。工女は三四名<sup>⑧</sup>で、そのうちには白峰製糸社の技術伝習者を含んでいたという。明治二九年手取川の水害により、炭倉一棟を流失したため、<sup>⑨</sup>のち段丘上に移転した。同所は集落を貫流する用水の川尻であったが、用水利用の規制が厳しいこと<sup>⑩</sup>から、明治三〇年水道株一株を求め、<sup>⑪</sup>工業用水を確保した。この工場は現在同家の製材所として利用されている。操業は春繭の出廻りから二月下旬までで、冬期は用水が凍り、また雪水が流入し、糸質を悪化する為休業したが、三月中旬より約一ヶ月春挽を行った。当初原料繭は地元を主体に集め、生糸は勝山方面に出荷した。白峰製糸場は爾後成立の工場の興亡をよそに戦時中まで持続し、まさに白峰における製糸の中枢をなす存在であった。しかも白峰製糸社が既成の大地主層により経営され、資金を官金に求めて失敗したのに対し、白峰製糸場が資産の背景がなく、文字通り裸一貫より出発し、

第8表 主要製糸場の経営実態 大正3年

工場名	白峰製糸場	清八工場	鶴吉工場	嘉助工場	桑島製糸場	
所在地	白 峰	白 峰	桑 島	白 峰	桑 島	
持 主	織田市次郎	織田清八	水上鶴吉	紙谷三五郎	藤場利之吉	
創業年月	明治23年6月	明治33年7月	明治35年6月	明治43年7月	明治45年6月	
年間操業日数	150	150	140	150	145	
就業時間	12(5.30—5.30)	12(5.30—5.30)	13(5.00—6.00)	12(5.30—5.30)	13(5.00—6.00)	
繰糸釜数	46	17	14	9	28	
工 女 数	53	20		8	26	
職工賃金(日)	*25銭	*25銭		23銭	*23銭	
労働人夫	男 2	女 2	男 1	男 1	男 4	
年間使用繭(石当)	300石(40円)	165石(40円)	100石(45円)	35石(40円)	80石(45円)	
年間繰糸高	器械糸量(貫当)	240貫(40円)	130貫(48円)	—	—	
	足踏糸量(貫当)	—	—	80貫(45円)	21貫(45円)	150貫(45円)
	屑物量(貫当)	80貫(4円)	40貫(4円)	35貫(3円)	9貫(4円)	60貫(3円)
廃業年	昭和17年	昭和17年	大正9年	大正10年	大正8年	
転業職種	真綿製造・製材	真綿製造	紳織(明42年)	材木運搬業 醬油醸造	紳 織	

白峰村役場製糸工場票による。 \* 大正5年の資料による。

第9表 白峰製糸場の推移

	職 工			釜数	就業 日数	就業 時間	繭使用高	生 糸 製造高	生糸製造 費(百斤)	職工賃金
	男	女	計							
明治27	3	34	37							
29	1	34	35	29			石 115	貫 138		
33	3	70	73		140	12				錢 20
36		70	70		140		249	149	180	円 15—18
38		63	63	38	130		255	153	160	
大正 3	2	53	55	46	150	12	300	240		
4		65	65	50	150		500 貫	432	200	25
8	3	54	57		130	13	6,300	600		80
14	2	55	57					450		80
昭和15	2	44	46	37			6,216	907		83

白峰村役場工場票による。

しかも事業に成功し継続し得たことは注目してよい点である。

#### 製糸場の簇出

座繰全盛時代と称される明治二〇年代、白峰の座繰製糸量は器械製糸量の $\frac{4}{5}$ に当る程であったが、明治三〇年代に至ると著減し、器械製糸が急増した。明治四〇年代以降にはまたやや座繰の復活をみたが、量的には器械製糸が増大を辿っている<sup>⑥</sup>。しかし製糸総量では明治三三年を一頂点として大正三年にいたるまでは減少傾向を示し、座繰戸数も減じている。この間製糸業者に変転があり、若干の集中傾向がみられた模様である。明治三三年から明治末年にかけて、白峰・桑島に三〇釜以下の工場の出現をみた(第八表)が、このほかにも数釜の小工場が簇生した。清八工場以外はすべて座繰(足踏)であったが、その経営者は一応の有資産であった。これらは大正九年の恐慌に転業し、自力をもって創業した両器械製糸場が風雪に耐えて持続した点はまことに感銘深い。

## 白峰製糸場の隆盛

当谷製糸の中軸をなした白峰製糸場について推移をみよう。第九表でその実態を概観するに、職工・釜数は漸次拡大、明治後期から大正中期にかけては最大であった。企業整備時三七釜であったというから、釜数ではのち減じている。しかし製糸高は増大し、とくに大正中期以降に著しい。全国的な製糸業の発展にともない、糸質の向上と経営の合理化が実施されていくのであるが、ここでもその必要は同様であった。すなわち足踏座繰からはじめて、明治二三年には水車使用、二条繰から昭和三年岡谷より購入の五条繰機械三七釜に代り、教婦も同所より招き近代化を計った。なお繭煮・揚返場乾燥用として蒸気汽罐(径三・二呎、長一〇呎)を大正三年豊橋より購入した。しかし全国的な近代化の歩調に同調はできず、相対的には設備の格差を漸次大きくした。こうした設備の劣勢は不況時に明瞭に示され、大正末期以降は赤字の年が多かったという。明治大正年代はその隆昌期で織田家は富の蓄積も多く、村内の有力者となった。しかし昭和以降の不況により赤字補填のため、時には蓄財を放出せねばならず、終業時の赤字は真綿製造への転換により漸く消化したという。ここではその隆盛の実態を眺めてみよう。

**原料繭** 繭は当谷中の白峰・尾口・新丸村などより買集めるのを主体とした。村内産繭量は明治二〇年代約二万貫弱、三〇年代一萬貫台、四〇年代から大正時代は一萬貫以下と漸次減少傾向を示している。明治年代製糸場の繭消費量は約二千貫台であるから、優に居質による地元調達が可能であった。繭買上帳の分析によってもこれは認められるが、大正中期以降の消費量の増大と地元製糸場の簇生は、産繭の減少とあわせて、地元の集繭を漸次困難にした(第一〇表)。交通の近代化がおくれた白峰も、大正時代鶴来方面から車道の建設が進んで来、大正一三年には白峰まで改修せられるに到ったので、遠方への出買は容易となった。かくて糸質の劣る二番繰の繭は宇ノ氣・犀川・今江・

第10表 白峰村繭生糸の移出入量

	移 出		移 入
	繭	生 糸	繭
明治27	4,000	260	
26		480	
43	500	800	2,000
大正 4		786	500
9		929	1,000

白峰村史 下巻 95—98頁による。

就労も多く、なかには四八年もの勤続者があったという。その賃金は同年二〇銭(第九表)、労働時間は一二時間であることもあわせて、県下機業の労働条件に等しく、決して好状態とはいわれない。大正時代の労賃事情(第一一表)もほぼ同様である。しかし明治二八年白峰村の女子賃金が農作日雇一〇銭、養蚕一一銭に対し、蚕糸練一五銭(役場資料)であることからみて、良好な現金収入の場であったことは認められよう。また同家では商業を営んでいたので、労賃も日用品の購入で清算される家が多かった。

**製品** 白峰製糸社が横浜への直売をなしたのに対し、白峰製糸場は越前への販売を主体とした。なかでも勝山への移出が圧倒的で、とくに白木屋との取引がその中核をなした。そのほか越前の大野・河和田・鯖江・粟田部や加賀の小松などにも若干販売した。大正一三年金沢方面への車道開通にともない金沢への出荷もみたが、昭和一〇年以降に本格化した。要するに北陸の機業に原料を供給していた。白木屋では横浜移出もした模様であるが、ここの製糸は

粟津などの県下養蚕地より集められ、白峰までの自動車利用が可能となるに及んで、富山・新潟・岐阜・愛知などより乾繭を買集めもした。遠方よりの繭は結局高価となり経営を圧迫する一要因となった。人背により集繭した時代が最も有利であったという。地元産繭量の減少は、糸価の暴落とあわせて製糸業の存続を危くさせた。

**工女** 地元白峰よりの通勤によった点は変りないが、その年令はたとえば明治三年の例では、一四才以上が四〇名のほか、一四才以下が三〇名もある点は注目したい。しかし事業が継続されたことから既婚者の

第11表

白峰製糸場工女の労働事情

大正2年

就 労 日 数		日給の階層別	
100日以下	人 2	10銭以下	人 1
100日～	3	10銭～	3
110日～	2	15銭～	23
120日～	1	20銭～	46
130日～	7	25銭～	44
140日～	7	30銭～	6
150日～	7	計	123*
160日～	3	物 価 (1升)	
170日～	2	餅 米	27.5 <sup>銭</sup>
計	34	上 米	24
賃 金 総 額		米	17
10円～	人 3	朝 鮮 米	20
20円～	7	支 那 米	20.5
30円～	15	稗	9
40円～	8	工女1日	24.5 <sup>銭</sup>
50円～	1	平均賃金	
計	34		

\* 決算は年間を3期にわけてあり、  
各期毎に集計したので工女数と合  
わない。 下組糸挽帳より計出。

輸出不合格の場合が多く、わずかに昭和七・八年に輸出したのみであった。その設備と製品の質からしてあえて輸出をねらわなかった点に、工場存続の一因由があったといえよう。

**資金** 多大の原料購入資金の手当は白峰製糸場として緊要のことであった。明治一〇年代までの政府保護干渉政策と自由放任政策のあとをうけ、二〇年代は米国需要の増大のもと、発展助長政策の採用により、製糸の躍進期となった。ところで資金は民間に求めねばならなかったが、銀行は製糸家への融資を危険視する時代であった。同製糸場の場合、当初資金は地元資産家より融資をうけたといわれる。これは製糸の有望性が見透されてのことではあろうが、他面織田市次郎の築いた長年の信用の結果でもあった。企業の確立により自己資本も漸次蓄積され、それは家屋・土蔵(蘭倉)・山林田畑等に転化もされたが、他方勝山の糸問屋・銀行ならびに県下諸銀行からの融資を可能にした。第一二表は一時期の事情を示すが、明治後期以降銀行融資が主体となり、村内資産家より金融機関へと移行してい

第12表 白峰製糸場の借入金額 (単位円)

	村内個人	勝 系	山 問 屋	勝山銀行	県内銀行	鶴来個人	計
明治37				5,000	4,000		9,000
38				8,400	3,000		11,400
39	3,400			9,650	4,500		17,550
40	2,100		3,500	11,816	4,500		21,916
41	2,500		500	3,880	4,400		11,280
42	14,300				3,050		17,350
43	6,650				3,700		10,350
44	3,150				3,700		6,850
大正元	3,150				8,400		11,550
2	150				13,280		13,430
3	150		6,300		10,850		17,300
4	250		2,700		13,800	1,000	17,750

万年大帳帳より計出。

る。この頃は村内融資者も実質は個人的金融業者が多くなっている。

**経理** 当製糸場の経理実態は明治末期の残存資料<sup>⑧</sup>により伺われる。それによれば明治四〇年が赤字二、一五〇円、四一年が黒字九九・九円、四二年が同じく一、八八一円となつている。一般にこの年代は黒字年度が多かつたといわれる。第一三表の収支内容をみるに、支出に掛員給料の計上がない。これは白峰製糸社が一応近代的組織をもつて、これに大きな経費をあつたのと(第五表)全く対蹠的であり、当製糸場の下からの自生的性格をよく示したものと見えよう。

明治四〇・四二の両年度を比較して、赤字の四〇年は蘭代の高率と生糸代の低率が目につく。繭糸価は製糸企業の成否を左右するものであるが、第七表と比較してもこの点は認められ

第13表 白峰製糸場収支決算の内容 (単位円)

			金額	比率	
明治四年	支	繭代	21,909.343	80.6	
		糸挽賃 (工女日給)	2,328.040	8.6	
		諸雑費	2,977,170	10.9	
		内銀行利子	1,427.640	5.3	
		駄賃	58.102	0.2	
		炭代	928.200	3.5	
		計	27,214.553	100	
	〇年	収入	生糸	22,944.130	91.6
			製斗糸・生皮芋・蛹	1,136.518	4.5
			玉繭	983.900	3.9
計			25,064.548	100	
	差引	-2,150.005			
明治四年	支	繭代	14,117.367	70.4	
		糸挽賃 (工女日給)	2,425.028	12.1	
		諸雑費	3,522.470	17.5	
		計	20,064.865	100	
	収入	生糸	20,362.520	92.8	
		製斗糸・生皮芋・蛹	1,223.455	5.6	
		玉繭	360.100	1.6	
		計	21,946.045	100	
		差引	1,881.210		

せしば、ぞよ長より計出。

第14表 生糸・繭・賃金の比較

	生 糸 (10貫)		繭 (10貫)		糸繰工女賃金(日)	
	明治40	42	41	42	40	42
白 峰 製 糸 場	円 685.6	538.1	円 29	27	銭 ×24.5	×24.5
石 川 県			38	33	25.0	25.0
全 国	670.6	450.6	41	41	▲47.5	▲31.3

×大正2年, ▲長野県のもをを示す。白峰製糸場以外は日本帝国統計年鑑による。

第15表 繭に対する生糸の比率

		白 峰 製 糸 社	白 峰 製 糸 場	
		明 治 13 年	明 治 40 年	明 治 42 年
生 糸	数 量	5.4%	6.5	7.2
繭	金 額	133%	105	144

糸売帳・繭入帳より計出。

よう。ところで第一四表では白峰製糸場の繭価は安く、生糸は高価であり、労賃もまた安い。とくに明治四二年の糸価は高く、これが結局は黒字を産む一大根源をなしたといえる。さらに第一五表で歩留をみるに、明治一三年に比較して向上傾向が見られるが、とくに明治四二年のそれは著しい。第九表から計出しても同製糸場の歩留は大正以降著しく進展しており、これも見落してならぬ点といえよう。しかし全国的な製糸業の近代化より見た場合、当工場当事者の言明では漸次先進工場との格差を拡大されていった。昭和三年の新機械の導入もこの対策であったとみられる。

一方、手取川水系にそい鶴来方面よりの道路改修が前進し、大正一三年には白峰・市ノ瀬に達したが、この交通発達も企業に影響した。坪買を主体としていた地元繭は外域市場と接続す

第16表 白峰製糸場生糸・繭価の全国との比較

	金額 (10貫当, 円)				指数			
	白峰製糸場		全 国		白峰製糸場		全 国	
	生 糸	繭	生 糸	繭	生 糸	繭	生 糸	繭
明治42	538.1	27	450.6	41	100	100	100	100
43	557.4	27	476.3	39	104	100	106	95
大正 2	591.3	39	488.8	46	109	144	108	112
5	723.0	47	665.0	54	133	174	148	132

糸売帳・繭買入帳, 日本帝国統計年鑑による。

るにいたり、その産額の減少とあわせて、購入価格は漸次約上り、逆に生糸の価格は糸況に影響されて低率化せしめられた。第一六表の指数は全国と比較してこの点を明瞭に示す。また一方交通改善にともなう賃労働力の発展により工女賃金も上昇された。かくて当谷の製糸業はその存立の有力な基盤を漸次崩壊させられていった。さらに第一次大戦時の著しい糸況の変動<sup>⑧</sup>はその対策に多大の苦心を要求せしめた。

#### 諸製糸場の転廢

かかる大正前期の製糸業の実情からして、当地製糸家中、小規模かつ設備劣悪なものはその打開の方途を見出し得ず、困惑状態におかれた。大正八年の好況にひきかえ、翌九年の糸価大暴落はこれら製糸家の進退を決定的にした。第八表のごとく坐繰製糸はこの時期に転廢し、多くは紬織に転じ、わずかに器械製糸の二工場が残るのみとなった。これらが創業年次が古く規模設備において優っていたことが持続の一要因といえよう。また坐繰製糸中には大正九年以前すでに紬織に転じたもののある点は、当地の製糸業の困難性を明示するものとみられる。

白峰村は元来冬季婦女の副業に紬を生産し、牛首紬として名声を博して来た<sup>⑨</sup>。ところで福井市の呉服商大丸栄次郎は専らその集荷販売に任じて

いたが、東京三越などに販路を得たことから量産に踏切り、大正七年白峰の一坐繰工場を購入して嘉久腰機業場を設立した<sup>⑨</sup>。翌八年には桑島製糸場がその分工場に転じた。また鶴吉工場も明治末年より兼業した紬織を主業とし、製糸を廃業した。かくして紬織は製糸に代るに到り、婦女は残存製糸場や坐繰の家内工業に従業するほかは紬織工女に転化収容された。

器械製糸は以後産額を増大し、若干の坐繰家内工業もまた残存し、製糸高においては昭和初期を最大期としたが、主産業としての地位は大正中期を頂点として退行していった。これに代るのは前記紬織のほか、交通改善にともなつて製炭・育林などの林業と製材業、治山治水の土木工事であり、その山村構造は漸次変貌をとげていった。

#### 四　　む　　す　　び

蚕糸業が少くも中央高地山村の経済に果して来た役割は絶大なものがあつたが<sup>⑩</sup>、白峰村もこの点は同様であつた。明治以降近代製糸場の発展は従来<sup>⑪</sup>の養蚕・製糸を分離発展せしめたが、白峰の場合その起源は交通不便な山村にもかかわらず、極めて早期である点は注目してよい。その発展の推移は上述のごとくで、明治二〇年代以降順調に進展し、大正中期を頂点として退行していったといえる。

全国の糸況は当然に白峰村の製糸業を浮沈せしめる主要因ではあつたが、白峰の製糸はさらにその僻遠性の制約を多分にうけ、当初良品の産出をみたにかかわらず、爾後の進展は軟調であつた。それは一は製糸技術の進運にとりのこされ、先進製糸業地との格差を漸次拡大していったこと、次は地元における原料確保に量的限界があり、かつ交通の発展につれての養蚕業の衰退傾向から、その規模の拡大合理化を抑制されたことによるといへよう。元来高価軽量の生糸は交通条件に恵まれぬ山村の産物として絶好のものであつたが<sup>⑫</sup>、糸況の悪化、交通改善に伴う新産業の導入

とによりその重要度を低めていった。繭価・労賃は糸価に対し相対的に高騰したが、これは製糸場の存立を足下より動揺せしめるものであった。しかし白峰の工業は製糸を原核として変転発展するのであり、かつその立地要因の多くを地元で求めたことからして、地域の変貌上果した役割には極めて大なるものがあつたといえよう。

資料の多くは白峰村史編纂の調査より得た。山下鉦次郎・加藤惣吉両村史編纂委員には格別の御尽力と御教示を得た。また村当局、村民各位の御協力、とくに織田利太郎、織田市次郎両家からは豊富な資料を快く借覽させていた。さらに白峰小学校東幸雄教諭、金沢大学教育学部の学生諸君、久野正子氏からは調査と整理に尽力していただいた。擱筆に当り深甚の謝意を表するものである。

#### 参考文献および注

白峰村史編輯委員会編白峰村史下巻(資料篇)からの引用は単に村史下として頁数のみを記すにとどめた。

- ① 田中路爾・幸田清喜 白山山麓に於ける出作地帯 地理学評論 三の四・五 昭和二年  
加藤助参 白山山麓に於ける出作の研究 京大農業経済論集 第一輯 昭和一〇年  
幸田清喜 白山麓白峰村 地域 創刊号 昭和二七年
- 若林喜三郎 近世における白山麓の出作り関係史料 — 白峰村のむつし文書を中心として — 魚澄先生古稀記念論叢 昭和

三四年

- ② 幸田清喜 白峰の出作り 現代地理学講座 2 昭和三十一年
- ③ 織田利太郎家文書 官金借用書類(仮題)
- ④ 村史下 四八〇頁
- ⑤ 同 八六三頁

- ⑥ 山本清助家文書 明治三年 万庭帳
- ⑦ 村史下 四四九頁
- ⑧ 杉原亀十郎家文書 明治十年 糸売買帳
- ⑨ 村史下 四八九頁
- ⑩ 白峰村誌大略（白峰尋常高等小学校 大正十年以降蒐集）には次のごとく示される。  
 「維新ノ頃マテハ養蚕家皆ナ自家ニテ生糸ニ製造ス。其繰方極メテ単純ニシテ、即チ工女ハ尺余ノ細竹ヲ手ニシ、ト形ノ梓杭ニ搬込メル糸棒ヲ回転スルニアレハ、一日僅ニ乾繭三升内外ヲ繰糸シ得ルニ過キサリシカ、明治二年当村織田利右エ門始メテ座繰車ヲ用ユルニ至リ、製糸法ハ稍進歩シ、一日ノ作業トシテ乾繭五升余ヲ製糸トナス」云々
- ⑪ 村史下 七〇六頁
- ⑫ 織田利太郎家文書 九代目ニヨル由緒書（仮題）
- ⑬ 渋沢敬三 明治文化史 第十一卷 二七〇頁 昭和三〇年
- ⑭ 開拓使 二府四県采覧報文 二〇二―二二一頁 明治前期産業発達史資料 第2集 昭和三四年
- ⑮ 石川県史 第四卷 八五〇頁
- ⑯ 石川県内務部 石川県蚕業沿革史 一五二―一五三頁 大正四年
- ⑰ 織田利太郎家文書 明治十一年 菅人取機械ヲ以テ生糸挽立方取弘メ見込御届
- ⑱ 山本清助家文書 明治十二年 菅人取機械ヲ以製糸創業願
- ⑲ 織田利太郎家文書 明治十二年 製糸試験御届
- ⑳ 農業発達史調査会 日本農業発達史 第五卷 五三九・五四五頁 昭和三〇年
- ㉑ 清水隆久 白山々麓における地内子制度の研究 石川商経研究 第四号 昭和三〇年

- ②② 村史下 四四一―四五六頁
- ②③ 田中丘隅 民間省要 日本經濟大典 第五卷 一〇三一―一〇四頁
- ②④ 信州繭はずでに加賀では若干消化されていた。金沢製糸社では地元繭のほか飛騨・信濃・上野より集繭している(前掲⑭)
- ②⑤ 石川県 石川県之産業 三六四頁 大正六年
- ②⑥ 石川県織物検査所 石川県絹業史 二九四頁 昭和一二年
- ②⑦ 織田利太郎家文書 明治十二年 製糸社則
- ②⑧ 内務省第一回年報 三四〇頁 維新産業建設資料 第二卷 昭和一九年
- ②⑨ 織田利太郎家文書 明治十一年 日記
- ③⑩ 村史下 一七八―一七九頁
- ③⑪ 織田利太郎家文書 明治十一年 雜書綴
- ③⑫ 輸出生糸平均価格は貫当明治一一年三三・九五、一二年三七・二四、一三年三六・八二、一四年三六・八三円である。(前掲⑳ 一五三頁より計出)
- ③⑬ 前掲⑬ 九八頁
- ③⑭ 前掲⑳ 五四五頁
- ③⑮ 織田利太郎家文書 明治十二年 起業資本金拝借願
- ③⑯ 村史下 四七〇頁
- ③⑰ 前掲⑳ 二九五頁
- ③⑱ 織田利太郎家文書 万歳記
- ③⑲ 同 明治十一年 生糸等売払帳

- ④① 鶴野俊一郎家文書 明治十五年 資本金拝借之義ニ付再願
- ④② 同 明治十六年 白峰製糸社資本金拝借ノ義ニ付敷願
- ④③ 織田利太郎家文書 明治十四年 豊成社申合規則
- ④④ 織田利太郎家文書 明治十六年 製糸場借請申定約証
- ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ④⑩ ④⑪ ④⑫ ④⑬ ④⑭ ④⑮ ④⑯ ④⑰ ④⑱ ④⑲ ④⑳ ④㉑ ④㉒ ④㉓ ④㉔ ④㉕ ④㉖ ④㉗ ④㉘ ④㉙ ④㉚ ④㉛ ④㉜ ④㉝ ④㉞ ④㉟ ④㊱ ④㊲ ④㊳ ④㊴ ④㊵ ④㊶ ④㊷ ④㊸ ④㊹ ④㊺ ④㊻ ④㊼ ④㊽ ④㊾ ④㊿
- ④① 織田利太郎家文書 明治二十年 地券預り証
- ④② 同 明治十二年 桑樹試作所日誌
- ④③ 拙稿 加越交界白山麓の交通 自然と社会 二〇号 昭和三十三年
- ④④ 村史下 八七六一八九四頁
- ④⑤ 白峰村役場蔵 明治二十七年 工場票
- ④⑥ 織田市次郎家文書 明治三〇年 万年大福帳
- ④⑦ 清水隆久 水と聚落 一白峰村の水道株について― 自然と社会 一二号 昭和二十九年
- ④⑧ 村史下 一〇二頁
- ④⑨ 織田市次郎家文書 製糸用汽罐設置関係文書。汽罐は分解して松任駅より馬車で深瀬に運び、あと二里の山道を歩荷により  
当所で組立使用した。
- ④⑩ 村史下 一〇一頁
- ④⑪ 金沢大学教育学部明倫同窓会 石川県師範教育史 一一三頁 昭和二十八年

- ⑤⑤ 織田市次郎家文書 明治四十一年―大正六年 糸壳帳
- ⑤⑥ 高橋亀吉 日本蚕業発達史 上巻 四七六頁 昭和一六年
- ⑤⑦ 前掲②⑥ 五六一頁
- ⑤⑧ 織田市次郎家文書 明治四十・四十一・四十二年 せしば、ぞよ、ちよ(製糸場雑用帳)
- ⑤⑨ 今井五介 日本蚕業発達史 七九―八五頁 昭和二年
- ⑥⑩ 前掲②⑥ 八五頁
- 石川県能美郡役所 能美郡誌 九六八―九六九頁 大正一二年
- ⑥⑪ 拙稿 飛騨における近世末期の商品流通 ―総括的な研究― 金沢大学教育学部紀要 第五号 昭和三二年
- ⑥⑫ 同 白山麓白峰村の歩荷―山村と担夫交通―金沢大学教育学部紀要 第八号 昭和三五年